

「陶教育」の現場から 一課題「土のあかり」制作を通して一

中 村 隆 文

東亜大学 芸術学部 アートデザイン学科
designm@toua-u.ac.jp

はじめに

本稿は、本学アートデザイン学科で実践している「陶教育」の紹介である。「陶教育」とは、やきもの作りを教材とした教育のことで、本学科では実材実習という授業（インテリアデザインⅠ・Ⅱ）で行っている。うちⅠでは陶磁器を、Ⅱでは木材を素材としたインテリアエレメント（家具や照明器具類）を制作している。ここでは、Ⅰでの課題「土のあかり」への取り組みにおいて学生がデザイン・制作した作品〔図1〕を紹介しながら、私が実践している「陶教育」について述べる。



図1 「土のあかり」学生作品 (1)

1. 本学における「陶教育」

具体的な授業内容を紹介する前に、学科のカリキュラムに触れておく。本学科の教育体系では、

学生は3年次の前期までにアートやデザインに必要なとされる基礎造形力や理論、各コース別の基礎（導入的内容）を学び、3年次後期に研究室に所属した後、各人の専門分野ごとの研究制作をするようになっている。基礎教育を重視しているのは、入学者の大半が、デッサンや構成課題といった実技経験に乏しいためである。また、多くの学生が専門的に何を学びたいか決めておらず、専門知識が不十分であることを考慮した結果でもある。

本授業は2年次後期の選択科目である。授業の目的や内容は、前述の内容を踏まえて決めている。その際、将来、仕事として映像やアニメを目指す学生や、陶芸に興味や関心の無い学生にも、やきもの作りの楽しさを多少なりとも実感してもらうよう工夫している。とくに心がけているのは、課題の制作を通して、何かが身に付く、何かに気付く、それらが自分の志すものづくりにも応用でき、創作に対する意欲や自信に結び付く、すなわち「雑草に自信を植え付ける教育」を旨とした「陶教育」である。

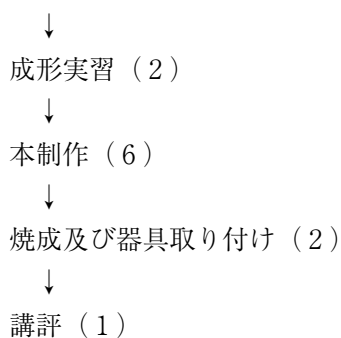
私は、「陶教育」の目指すものは、ものづくりとして必要な資質を「陶」によって鍛えることであり、創造と造形の基礎力、そして生きていくための基礎力の教育であると考えている。

2. 授業内容

ここでは、授業の内容について述べる。以下、授業のカリキュラム、課題制作上の条件、課題の内容、この授業で導入したタタラ成形の順で説明する。まず、カリキュラムは次のようになっている。

2. 1. カリキュラム ()内の数字は授業回数

- 1) 授業名：インテリアデザインI (エレメント)
- 2) 授業時間：週2コマ×15週 (1コマ=90分)
- 3) 授業形態：実習 (図2-1)
- 4) 授業テーマ：「陶磁器の素材を生かしたインテリアエレメントのデザイン」
- 5) 課題名：「土のあかり」制作
- 5) 授業計画：プランニング (4)



陶磁器を素材としたインテリアエレメントといえ、食器=TABLE WARE (テーブルの上を飾るモノ)が一般的である。しかし、学生制作課題として食器を検討した結果、食器の種類がきわめて多岐に渡ることと、受講学生の年齢や嗜好からしても、適当でないと判断した。そこで、食器に代わるものを探すことにした。最終的に、暮らしへの提案性があり、機能性と装飾性を兼ね備え、陶磁器の素材が生かせるエレメントとして照明器具 (あかり) を選んだ。照明器具をデザインする際、イメージやコンセプトを自分自身である程度自由に発想できる点も考慮に入れている。

授業計画では、半分の時間をプランニング (デザイン計画) と成形演習にあてている。これは、プランニングの内容によって作品の完成度が変わること、学生が多くが「土」という素材に触れた経験が少なく、自分自身で素材を十分にコントロールできないためである。[図2-1]は、工房での実習風景である。



図2-1 工房での実習風景

2. 2. 制作する上での条件

私は、課題を与えるにあたって必ず条件を付けるようにしている。今回の課題「土のあかり」制作では、「あかり本体の形状は円筒を基本とする」を条件とした。これは、円筒形が、授業で導入したい成形方法 (タタラ成形) で作りやすい形状であるためであるが、いまひとつの理由は、学生たちに、付与された条件下で、形状に合った、形状を生かしたデザインを考えさせるためである。

課題に条件を付ける目的は次の2点である。一つは、学生に考えるポイントや教授したい内容を明確に伝えるためである。「自由に考えなさい」という言葉は、逆に学生を縛ってしまうこともある。二つ目は、学生に、一定の条件下・時間内において、自由に発想出来る要素を使いながら、できるだけ内容のある作品を制作させるためである。実際のデザインの仕事では、「人」や「もの」や「こと」が条件になるので、こうした条件付けには妥当性があると考えられる。

2. 3. 課題の内容

具体的な課題文と制作上の条件を記しておく。後で紹介する学生作品の写真を観るときの参考にしたい。

○課題文

下記条件を踏まえ、タタラ (板状の粘土のこと) で成形した円筒形状の本体に「切る」「あける」の行為を施し、「土のあかり」を制作しなさい。

○条件

- ・光源は本体下部または上部に設置。
- ・光源の種類は白熱電球25Wを使用。
- ・「切る」「あける」の形、数、大きさ、位置は自由とする。※道具はある程度限定。
- ・できるだけ光源が直接見えない間接照明とする。(間接照明になるよう形や構造を考える)
- ・機能性と鑑賞性に優れたデザインを指す。言い換えるならば、光源を付けたときも消したときも魅力あるデザインを考えること。
- ・「あかり」という言葉に対して、独自のイメージや発想を基に光の形や演出をデザインすること。
- ・円筒形状の形にあった、また生かしたデザイ

ンを考えること。

- ・土の素材感や特性をデザインに取り入れること。

なお、〔図2-2〕, 〔図2-3〕は、条件を踏まえた参考例として課題文に掲載したものである。



図2-2 光源をつけたあかり



図2-3 光源を消したあかり

2. 4. タタラ成形

今回の課題制作では、タタラ成形を導入した。タタラとは、板状の粘土を意味し、タタラを使って形を作ることをタタラ成形という。この成形で作られた器は、ロクロ物や型物に対して板物と呼ばれることがある。板物というと、私は民芸に属するやきもので福島会津宗像窯のにしん鉢を思い出す。〔図2-4〕のように、ニシンを漬ける^{あめゆう}銚子の掛った四角い陶器製の鉢である。

タタラ成形の歴史は古く、原始より埴輪作りにも使われている。タタラの語源は、^{たたら}踏鞴製鉄の^{ふいご}鞴板が^{たたら}踏鞴と呼ばれていたことに由来するとか、粘土を叩いて板状にすることから付けられたなどの諸説あるが、正確なところはわからないようである。しかし、いずれにせよ、タタラ成形が陶磁器作りの代表的な成形技法の一つであることは間違いない。この授業では、タタラ板〔図2-5〕と

セルローラー（タタラ成形機）〔図2-6〕の二つの方法でタタラの作り方を導入した。

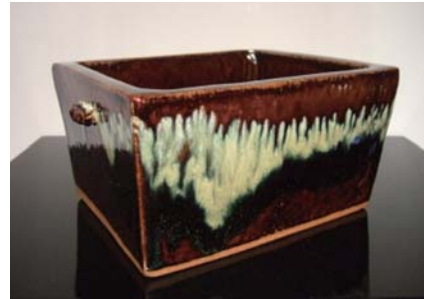


図2-4 にしん鉢



図2-5 タタラ板（粘土塊左右に重ねてある木の板＝定規のようなもの）によるタタラ作り



図2-6 セルローラーによるタタラ作り

前述した二つの方法で作製したタタラを使い、円筒形状の器を成形実習として、本制作の前に作った。成形に使用した道具をはじめ、成形作業や完成品を図示する。〔図2-7, 2-8, 2-9, 2-10〕



図2-7 道具及び材料（1）

上部二列重ねてあるものがタタラ板（5mm厚）



図 2-8 道具及び材料 (2)

左から：どべ（接着剤）の入った乳鉢，中央：藁半紙を巻いた塩ビパイプ（中型），右：タタラ，手前：各種成形道具



図 2-9 成形作業 中型となる塩ビのパイプにタタラを巻き、その両端を接着後、底となる粘土板を接着しようとしているところ。この後、塩ビのパイプを抜いて完成となる。塩ビのパイプに藁半紙を巻いているのは、中型の塩ビパイプを抜きやすくするための工夫。



図 2-10 完成品 直径約13cm×高さ約20cm×厚さ 5 mm

3. 学生作品の紹介

ここでは、学生が、プランニングから完成までの各工程でどのような指導を受け、どのような工夫をこらしながら作品を完成させたのかを、具体的な作品で説明したい。

(1) 学生作品 1 題名「リンゴの気持ち」

作者は里谷銀河さん（山口県，誠英高等学校出身）〔図 3-1〕は光源を消した時のあかり Put out the light, 〔図 3-2〕は光源をつけた時のあかり

Turn on the lightである。また，〔図 3-3〕〔3-4〕は，同じアイデアで素地の柄を変えて制作した作品である。



図 3-1 「土のあかり」学生作品 (1)

Put out the light



図 3-2 「土のあかり」学生作品 (1)

Turn on the light



図 3-3 (左) 素地の柄を変えた学生作品 (1)

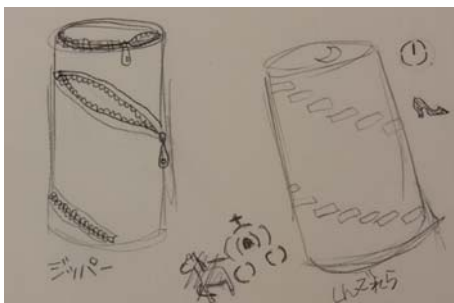
図 3-4 (右) 素地の柄を変えた学生作品 (1)

3. 1. プランニング

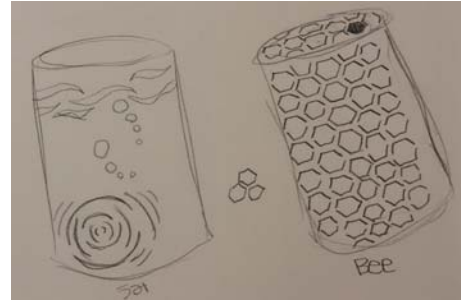
この工程では、まずラフスケッチで絵や言葉(キーワード)をできるだけ多く書き出し、アイデアやイメージを絞っていく。方法論としては、多くのアイデアを、さまざまな観点から客観的に絞っていくという手法である。絞ったものを広げてはまた絞る。この「広げては絞る」をできるだけ多く繰り返すことで、最終的な作品の完成度は上がっていく。この過程を示したエスキース(スケッチ)が下のアイディア1-8である。広げたアイデアの中から絞り込まれたのはリンゴであった。



アイデア 1・2



アイデア 3・4



アイデア 5・6



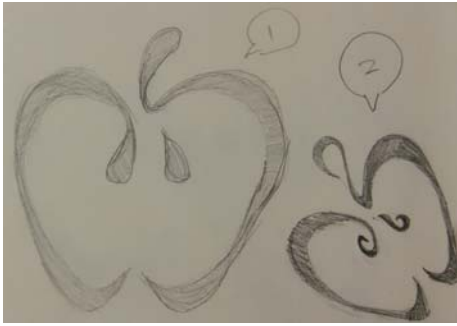
アイデア 7・8

作者の学生が出してきたアイデアは8案あった。その中で、客観的に見てどのアイデアが一番おもしろくなりそうか検討させた。この作業には、私もチェックを入れたが、基本的には本人の希望を尊重した。こうして決定したのが、[アイデア7・8]の左側に描かれている「リンゴ」である。本人が考えたデザインコンセプトには次のようにあった。

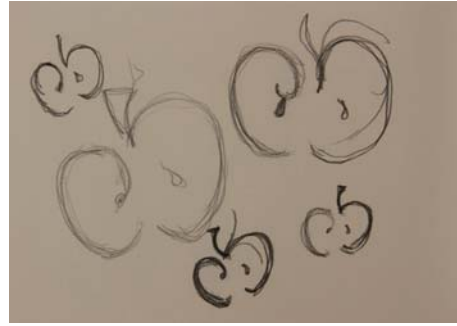
「円筒形状の側面にリンゴのシルエットの形で切れ込みを入れ、光源をつけたとき、リンゴの形が浮かびあがって見えるようなあかりにしたい」

「リンゴの^種や種といったディテールの形を強調させることで、リンゴらしさや、かわいらしいイメージを表現したい」

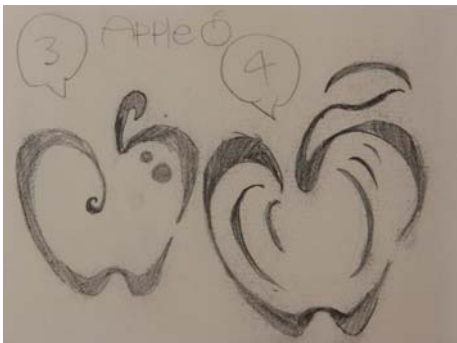
ここまでコンセプトが明確に決まれば、あとは具体的に詰めていく作業、すなわち、リンゴの形や大きさなどの観点から再度、アイデアを広げていく作業である。[アイデア9~13] 具体的には、リンゴの形や大きさ、位置、切り方、リンゴの形が浮かび上がって見えてくるような開け方をどう工夫するかである。



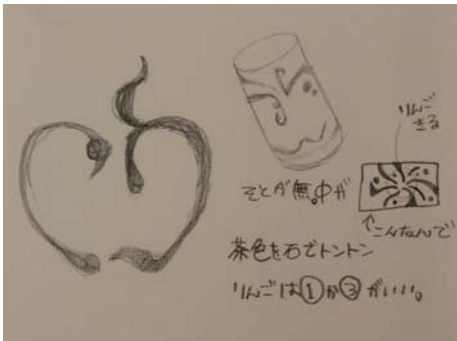
アイデア9



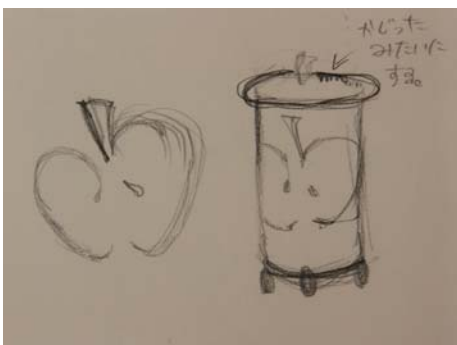
アイデア13



アイデア10



アイデア11



アイデア12

3. 2. 成形実習から本制作へ

次は、粘土モデルでリンゴの大きさ、位置、切り方、開け方などを検討する作業である。成形実習においては、所定のメニュー〔図2-9〕をこなしながら、出来たものをモデルとして、「はばり」〔図3-5〕という金属製の道具を使って切り方や開け方を試させた。切る角度によって漏れる光の形や表情が変わるので、切り方は非常に重要になる。作業の途中では、切ったリンゴの形がちぎれて脱落するなどの失敗もあったが、何とかリンゴの形、大きさ、位置、切る角度を決定することができた。開け方は、リンゴ上部左右のラインをあかり本体の中に少し押しこみ、下部左右のラインは外に出すようにした。こうした工夫により、光源をつけた時、外に漏れる光の明暗の違い（図3-2参照）によって、狙いとしたリンゴの形が浮かび上がってくるような視覚効果を実現できた。



図3-5 粘土を切る道具はばり（筆者手製）

本制作では、リンゴの曲線の形に対比させながら、横縞の柄を練り込み技法（図3-6参照）によって表現させた。その結果、対比効果によって、リンゴの形がより一層魅力的に見えてきた。同時に、条件の一つである、光源を消したときも鑑賞性に富むデザインとなった。



図3-6 練り込み技法による表現（作品部分）および施釉した部分（蒂と種の部分）



なお、〔図3-3〕〔図3-4〕は、練り込み方を変えて試みた作品である。

〔図3-3〕は縦縞の柄になるように、〔図3-4〕は渦巻の柄になるように色土を重ね、セルローラーでタタラにしたものを素地として使用した。

3.3. 焼成・仕上げ

焼成においては、できるだけ「土」の持ち味を生かす目的で、施釉は蒂と種の部分のみにとどめた。（図3-6参照）仕上げはソケット台座（素材は木材）（図3-7）の加工である。コードの配線処理を行いながら、漏れる光が一番効果的になるよう電球の高さにも注意を払った。



図3-7 加工したソケット台座

3.4. 制作を終えて

制作する上で、作者が最も苦勞したのは、切る作業であった。切る角度に注意しながら、ひと筆書きと同じ要領で、つまり一発勝負でリングの形を切らなくてはならないからである。現存するやきもの中には、ミリ単位の透彫を施した、とても人間業とは思えない薩摩焼の香炉（図3-8）などもある。だが、熟練技術をもたない学生にとっては、制作上どうしても技術の壁が立ちほかかる。



図3-8 秘伝の透彫 苗代川 沈壽官陶苑

出来上がった作品は、制作条件をある程度のレベルでクリアできており、「土のあかり」として評価できる作品となった。発想した「リング」にも独自性を感じるし、立体作品としても、点・線・面を踏まえたまとまりのある物である。先の〔アイデア1～8〕のエスキースの画力を見てもわかるように、作者は制作経験が少ない学生の一人である。しかし、この課題制作においては、授業の趣旨や指導内容をうまく自分のものとして引き寄せ、それを独自に広げることができたと思う。本人も満足いく作品に仕上がったのではないだろうか。現在、作者は3年生の後半で、特別研究では木材を素材とした立体作品に取り組んでいる。同じものづくりのひとりとして、さらなる飛躍を期待する。

以下2作の学生作品を紹介するが、ここでは作品の写真資料と簡単な解説のみ記述することにする。



図3-9 「土のあかり」学生作品（2）

題名「べろ、べろ、ばぁー」

作者は角裕貴君（福岡県，敬愛高等学校出身）

作者はプランニングの中で，手で土を裂くことによりできる，土らしい質感とおもしろさに気づき，それを主な制作上のアイデアとした。また裂き方によって表情をもった人の口のようにも見えることから，全体をユニークな形にデザインした。

光の演出については，下向きに光が漏れる構造とし，床に光の形を投影させることを試みている。光を二分させるために，裂いた形の中央に紡錘形の粘土塊を取り付けた。また木材と陶器の質感の対比による効果も考え，光源は本体上部に取り付けている。



3-10 「土のあかり」学生作品（3）

題名「Milky Way」

作者は吉田留依さん（山口県，宇部西高等学校出身）

渦巻の形を点の連続で表現したあかりである。点はポンス（図3-11）という土に穴を開ける道具を使い，完全に開けた穴，半分開けた穴，粘土の色玉でふさいだ穴の3種の加工を施し，漏れる光の変化と抑揚のある渦巻の曲線を実現させた。

色玉も3色（赤・黄・青）とし，それに合わせてプロポーションの違うものを3つ制作した。光源をつけると，白い素地とも相まって，題名の「Milky Way」＝「天の川」のごとく，室内空間の中で美しさと癒しを与えてくれる作品に仕上がった。円筒形状にバランスよく渦巻の形が構成されている点も含め，大変評価できる作品である。



図3-11 ポンス

先が刃になっており，回しながら穴を開けていく道具

おわりに

—作る楽しみは授業の現場にもある—

「陶教育」の現場から，ということで，長々と授業内容を紹介してきたが，最後にまとめとして，私の教授法に少し触れておくことにする。

本学科には助手制度がないため，授業計画から準備，指導に至るまですべて一人でこなさなくてはならない。どの大学でも同様だと思うが，立体・実材系の実習の場合（体験させるのが目的の授業なら話は別であるが），全体授業では指導にならず，特に何かデザインさせる授業内容の場合は，どうしても個々の学生に対応した指導が必要になってくる。また，そうでなければ授業成果も挙げられない。つまり，10人の学生が受講すれば，10通りの個性や発想に対応しなければならないのである。本来なら，自学自習が理想なのであるが，「好きに作りなさい」と言い放つことは非常に危険である。経験上，単なる泥遊びで終わってしまうことが多いからだ。このように書くと，「陶教育」の指導は大変で辛いことばかりのように思われるが，逆にそれが楽しいことでもある。

課題制作の中で学生に考えさせながら，指導する側も考える。作らせながら，作って見せる。昔の徒弟制度のように，「見ながら覚えなさい，感じなさい」という指導もする。課題によっては，実際に一緒に制作することもある。作ることに本

気にさせる指導。やる気をおこさせる指導。臨機
応変にその場、その場の目的にあった指導が必要
となってくるが、理想は教師と学生が工房を共有
し、制作を通して、教え、教えられることができ
る授業でありたいと思う。

今回紹介した「土のあかり」をデザインしなさい
という課題において、学生作品（1）の「リン
ゴ」のような発想はとても私にはできない。作る
楽しみは授業の現場にもある。共に制作すること
が、私が考える理想の教授法である。



図4 ともに制作した筆者の「土のあかり」

〔引用資料〕

- ・〔図2-4〕にしん鉢（宗像窯公式ホームページ）
- ・〔図3-7〕秘伝の透彫 苗代川 沈壽官陶苑
（淡交社 日本のやきもの 薩摩）

